

## 基体となる要素のタイプによる 英語派生名詞句の派生過程の類似点と相違点について

増 富 和 浩

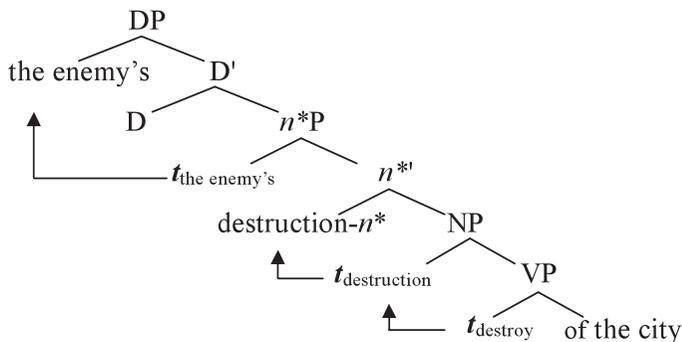
### 1. はじめに：派生名詞句の内部構造

生成文法の枠組みにおいて、(1b-d) に示すような派生名詞句（動名詞句を含む）の内部構造は、節構造との意味的・統語的類似性の観点から議論されてきた（具体的には、Abney (1987), Radford (2000, 2004), Masutomi (2009, 2010), 増富 (2009) などを参照）。

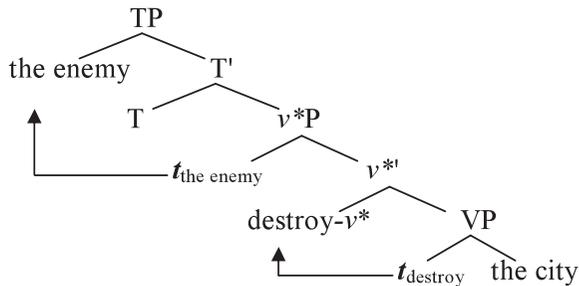
- (1) a. *The enemy destroyed the city.* (他動詞節)  
 b. *We are surprised at the enemy's destruction of the city.* (派生名詞句)  
 c. *We are surprised at the enemy's destroying of the city.* (名詞的動名詞句)  
 d. *We are surprised at the enemy's destroying the city.* (動詞的動名詞句)

例えば、Masutomi (2009) や増富 (2009) は、ミニマリスト統語論 (Chomsky (2000, 2001, 2004, 2008) などを参照) の観点から動作主名詞句 (Agentive Nominals) や動名詞句の内部構造を議論しているが、上記 (1b) のような名詞句の内部構造と派生過程を (2a) のように議論し、(2b) に示すような節の派生過程と比較して、派生に含まれる統語範疇 (決定詞 (D)、名詞 (N)、動詞 (V)、時制要素 (T) など) の違いを除けば、名詞句の派生過程も節の場合と同じ枠組みで議論できることを示している。

- (2) a. *the enemy's destruction of the city*



b. The enemy destroyed the city.



上記のような派生過程の詳細な説明については後述することとし、名詞句の派生に関して主な点を概略すると以下のようである。

(3) a. ミニマリスト統語論における節の派生と同様に、派生名詞句の基本構造は、2つの構成素を連結して新たな構成素を形成する併合操作 (Merge) を順次適用していくことで形成される。

b. 名詞句の派生過程にも移動操作 (Move: 矢印で示した過程) が含まれ、この操作の適用により統語的な位置が正しく保障される。

このように考えると、先行研究が論じているように、名詞句の派生過程は節の派生過程と同じ方法により統一的に論じることができるように思われる。しかしながら、従来の研究では、destroyなど一部の限られた動詞についての議論が多く見られた。派生名詞句には、destroyなど、特定の行為（あるいは出来事）や変化の原因となる主体（動作主：統語的には主語）を要求する動詞（動作主動詞）を基体とするもの（動作主名詞句）ばかりではなく、他にもenjoy、fear、frighten、pleaseのような心理動詞 (psychological verb)、arrive、appearのような非対格動詞やcry、laughのような非能格動詞など、異なるタイプの要素を基体とする派生名詞句が存在する。そこで、本稿では、(2a) のような派生名詞句の派生モデルを用いて、destroyタイプ以外の動詞を基体とする派生名詞句の派生過程を統一的に説明できるか、さらに、そのような派生過程を論じる場合にはdestroyタイプの派生過程との相違点が観察されるのかという2点について主に議論することにする。本稿で議論する具体例は、以下のようなものである。

- (4) a. **Israel's withdrawal of troops** (from the occupied territories) (動作主名詞句)  
 b. **the children's amusement at the movie** (心理名詞句)  
 c. (I am waiting for) **his arrival at the hotel**. (非対格名詞句)

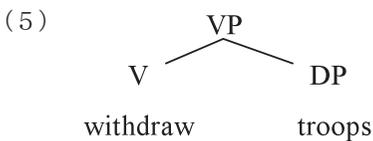
## d. his laugh at the beginning of the talk (非能格名詞句)

## 2. 他動詞を基体とする派生名詞句の派生過程について

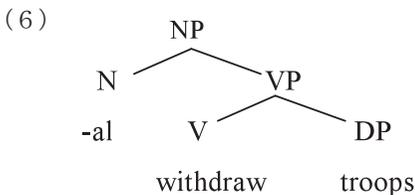
本節では、他動詞の中で代表的な2つのタイプ、すなわち、destroyのような動作主動詞と、amuseやpleaseなどの心理動詞を基体とする派生名詞句の派生過程について順次議論することにする。

## 2. 1. 動作主動詞を基体とする場合

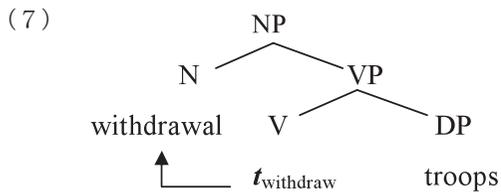
まず、(4a) に示したような動作主名詞句の派生を考えてみよう。この名詞句の主要部 withdrawalの基体動詞withdrawは動作主を主語とする他動詞 (cf. Israel withdrew troops from the occupied territories.) であるので、すでに本稿の導入部分において確認したthe enemy's destruction of the city (cf. The enemy destroyed the city.) の場合と同様に動作主動詞を基体とする派生過程により説明できると考えられる。ここでは、本稿の提案する派生過程の詳細を示しながら、再度、動作主動詞を基体とする派生名詞句の派生過程を検討することにする。具体的な派生は、以下のように進行すると考えられる。



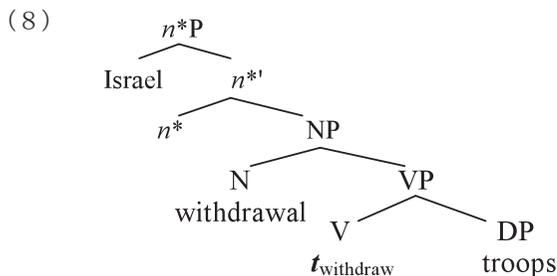
まず、(5) に示すように、基体動詞 (V : VPの主要部) のwithdrawとその目的語の名詞句 (DP) troopsに併合操作 (Merge) が適用され、動詞句 (VP) が形成される。次に、名詞化接辞 (-al) と (5) の併合により、-alを主要部とする名詞句 (6) が形成される。



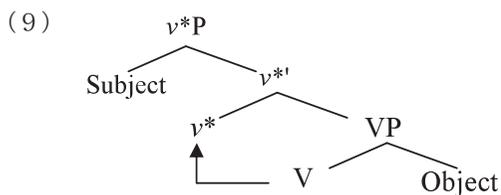
(6) においては、生成文法の枠組みで一般に議論されてきたように、-alは接辞であるので、それ自体で自立することはできず、(7) に示すように、基体となるwithdrawの移動を駆動し、現在議論している派生名詞句の主要部withdrawalが形成されることが考えられる。



次の段階で、(7)のNPは音形を持たない主要部  $n^*$  と併合され、軽名詞句 ( $n^*P$ ) が形成される。さらに、この構造に現在議論している例での主語となるIsraelが併合されることで、(8)に示す構造が形成される。

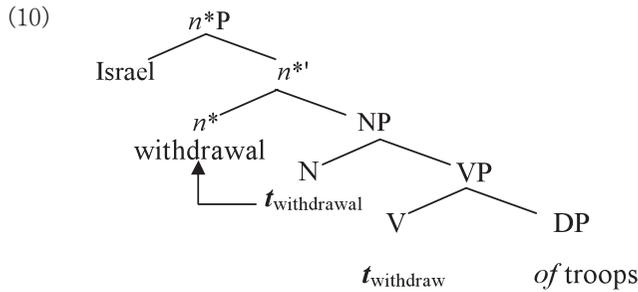


ここで、以下の議論の参考のために、ミニマリスト統語論の枠組みにおける他動詞節の派生過程の議論を確認しておくことにする。1980年代までの伝統的な議論とは対照的に、ミニマリスト統語論では、他動詞節の動詞句は単なるVPではなく、(9)に示すように  $v^*P$  (軽動詞句) とVPの複合体 (VPシェル構造) として説明されている。

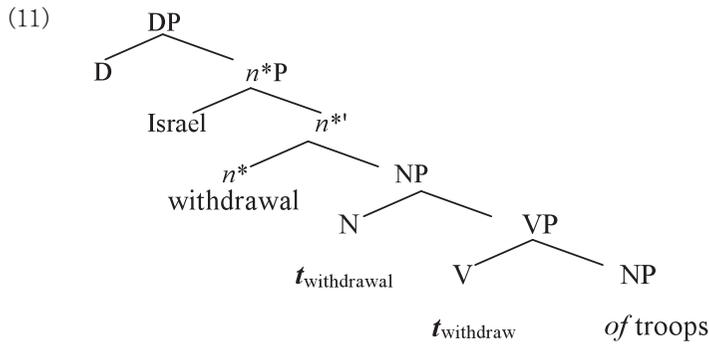


(9)においては、VPの主要部Vが  $v^*P$ の主要部  $v^*$ へ移動する過程が含まれているが、これは、 $v^*$ が接辞的な性質を持つと仮定されているためである。このような構造において、 $v^*$  (正確にはVが  $v^*$ へ移動した後の  $v^*-V$ 複合体) が目的語 (Object) への対格付与能力を持つと説明されている。本稿では、節と名詞句の意味的・統語的並行性の観点から、派生名詞句の派生においても同様の過程が適用できると考えることにする。従って、上記の(8)の構造において

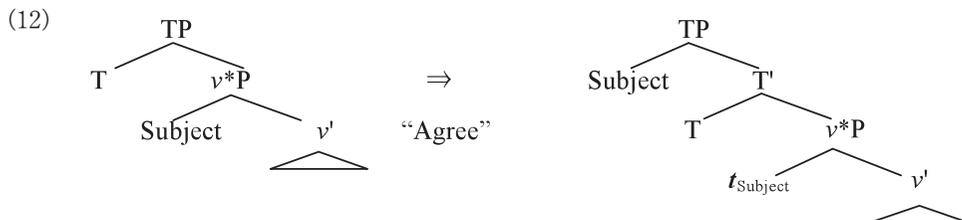
も、NPの主要部N（つまり withdrawal）が  $n^*P$ の主要部  $n^*$ へ移動し、その後、目的語のtroopsへ（節の派生における対格に相当する）of 格が付与され、以下のような構造が形成されると考える。



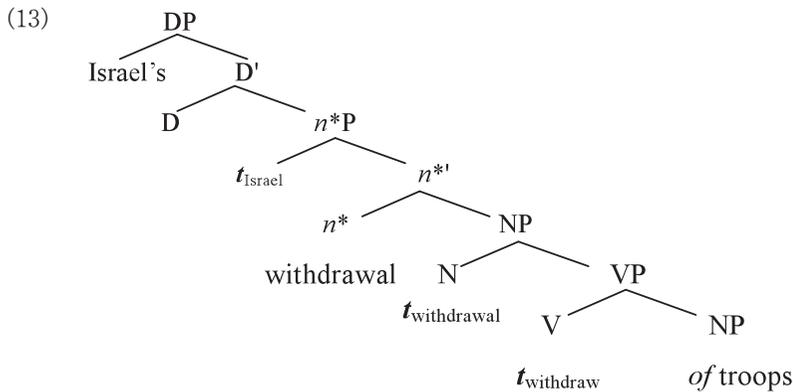
この後、名詞句の最大投射とされるDP (cf. Abney (1987))の主要部Dが (10)の構造と併合され、以下の構造が形成される。



ここで、再度、節の派生における主語への主格付与の仮定を確認しておく、以下のとおりである。



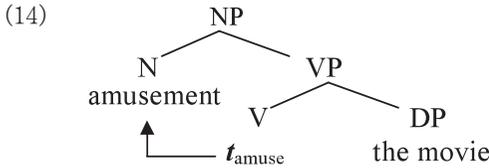
節構造においては、動詞句の上に時制要素（Tense:T）が併合されて時制句（TP）が形成され、その構造において、主要部Tと主語（Subject）との間に一致操作（Agree）が適用された結果、主語と動詞の形態的な一致（e.g. He goes/\*go to school.）が保障されると議論されている。さらに、この一致操作に伴って、Tから主語への主格の付与が行われるとともに、主語のTP指定部への移動が起こると仮定されている。本稿では、節と名詞句の並行性の観点から、このような過程が名詞句の派生過程にも想定できると考えることにする。従って、上記の（11）においては、Dと主語との間に一致操作が適用され、主語に属格（または所有格）が付与されるとともに、主語のDP指定部への移動が生じ、最終的には（13）の構造が形成され、（4a）に示したIsrael's withdrawal of troops（from the occupied territories）の派生が終了すると考える。



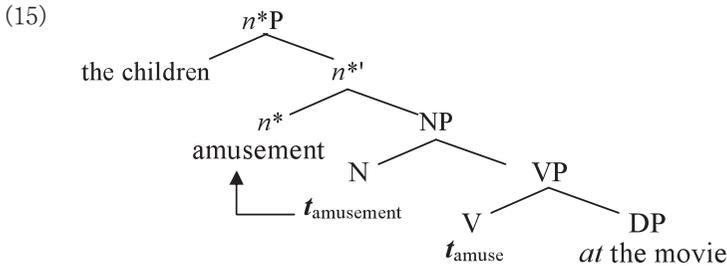
## 2. 2. 心理動詞を基体とする場合

本節では、前節の動作主名詞句の派生過程に関する議論を踏まえて、一般に心理動詞と呼ばれるタイプの動詞を基体とする名詞句の派生過程について議論することにする。心理動詞は、驚き、喜び、怒りなどの心理状態を表わす動詞の総称であるが、本節では、（4b）に示したthe children's amusement at the movieの派生過程について考えることにする。なお、本節以降の議論では、紙面の都合上、動作主名詞句の派生と共通の部分は簡略化して示し、各派生過程の特徴的な部分について注目することにする。

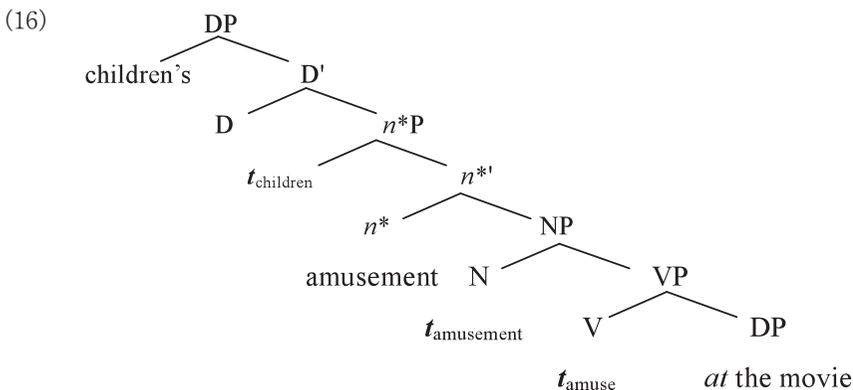
（4b）の主要部名詞も他動詞を基体としており、その派生過程は、基本的には動作主動詞の場合と同様に進行すると考えられるので、まず派生の初期の段階では以下の構造が形成される。



(14) では、基体動詞のamuseと目的語のthe movieとに併合操作が適用されVPが形成された後、NPの主要部N（具体的には、名詞化接辞-ment）が併合されることで、NPへと派生が進行する。ここで、動作主名詞句の派生の場合と同様に、-mentは接辞であるので単独で自立することができず、VPの主要部であるamuseの移動を駆動し、amusementが形成されると考えられる。次に、軽名詞句の主要部  $n^*$  および主語のthe childrenが (14) のNPと併合され、(15) の  $n^*$ Pが形成される。



(15) の構造においては、前節の議論と同様に、 $n^*$ の持つ接辞的な特性が、amusementの移動を駆動している。また、節の派生における目的語への対格付与の場合と同様に、目的語のthe movieは、軽名詞句の主要部  $n^*$ から格を付与され、その結果はatという前置詞により具現化されている。この後、(15) と名詞句の最大投射DPの主要部Dが併合されることにより、(16) のDPが形成される。



(16) の構造において、主要部Dと主語のchildrenとの間に一致操作が適用され、childrenに属格が付与され、同時にchildrenのDP指定部への移動が駆動され、派生が終了すると考えられる。

### 3. 自動詞を基体とする派生名詞句の派生過程について

前節までの議論で、動詞のタイプは異なるが、いずれも他動詞の特性を持つ要素を基体とする派生名詞句の派生過程を議論してきたので、本節では自動詞を基体とする場合について議論することにする。一般に、英語の自動詞は非対格動詞と非能格動詞とに大別される。具体例を(17)に示す。

- (17) a. A bus arrived at the station. (非対格動詞)  
b. Mary swam in the river. (非能格動詞)

(17 a, b) の自動詞はどちらも主語と前置詞句を伴い、一見すると同じ統語環境に生じているように思えるが、それぞれの主語 a busとMaryに注目してみると、Maryは自発的に泳ぐという動作を行う動作主であるのに対し、a busの方は自発的に駅に到着するのではなく、むしろ移動の対象物として理解されるであろう。このような特徴から、生成文法の枠組みにおいては、(17 a, b) の動詞はそれぞれ以下のように分析されてきた。

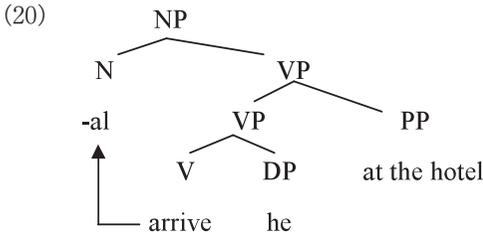
- (18) a. [TP ↑ [VP arrived a bus at the station]] (非対格仮説)  
b. [TP Mary [VP swam in the river]]

つまり、(17 a) の主語 a busは、もともと arriveの目的語の位置に生起し、派生の過程で主語の位置へ移動したと考えられるのに対し、(17 b) のMaryのような（動作主的な）主語は最初から主語の位置に生起すると分析されている。(18 a) に示される分析は一般に非対格仮説(Perlmutter (1978)などを参照)と呼ばれている。このような分析に注目し、本節では、自動詞であってもタイプの異なる動詞を基体とする名詞句の派生過程について、以下のような例を議論することにする。

- (19) a. (I am waiting for) his arrival at the hotel. (非対格名詞句= (4 c))  
b. his laugh at the beginning of the talk (非能格名詞句= (4 d))

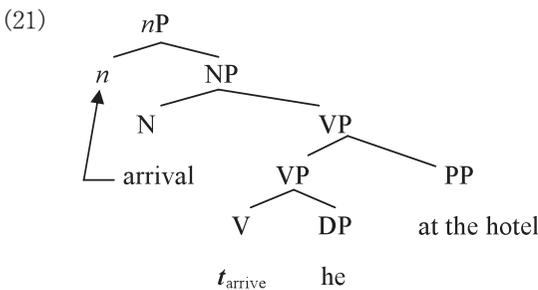
3. 1. 非対格動詞を基体とする場合

まず、(19a) の非対格名詞句の派生を考えることにする。すでに示したように、非対格仮説に基づけば、問題となる派生の初期の段階は以下のものであると考えられる。



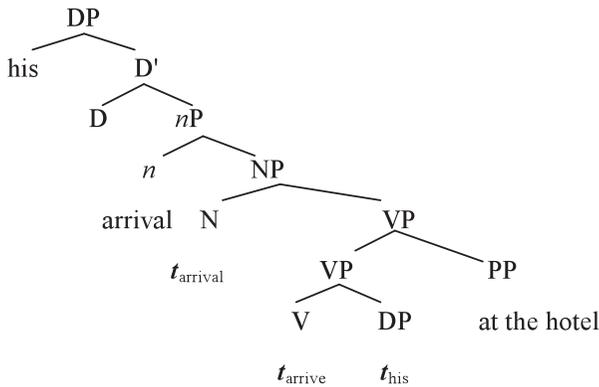
(20) の構造においては、統語的な主語であるheは、非対格仮説に従って、派生の初期の段階では目的語の位置に生起している。なお、前置詞句PPの位置は副詞等の修飾語が生起できる位置（付加位置）を示している。この構造においても、前節までの分析と同様に、NPの主要部Nは名詞化接辞-alであるので、動詞arriveの移動を駆動し、結果としてarrivalが形成されることが考えられる。

次に、軽動詞句の主要部 *n* が (20) と併合されると、(21) の構造が形成される。(21) では、軽名詞句の主要部は *n\** ではなく、(節と名詞句の統語的並行性の観点から) 自動詞節の派生において仮定される自動詞句 (*v*P) の主要部 *v* と同様に格付与能力を持たない *n* であると仮定している。しかし、この場合も、*n* の接辞的な特性によりarrivalの*n*への移動は駆動されることが考えられる。



この後、前節までの議論と同様に、(21) の*n*Pは名詞句の最大投射DPの主要部Dと併合し、(22) のDPを形成する。

(22)

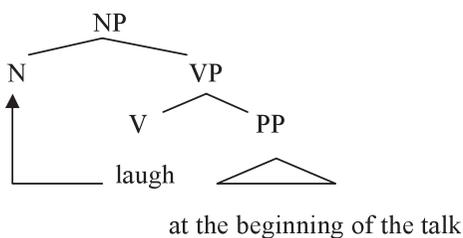


この構造において、主要部Dと目的語位置にあるheとに一致操作が適用されることで、heに属格が付与され、その結果はhisとして具現化される。同時に、hisのDP指定部への移動が駆動され、(19 a) の派生が終了する。

### 3. 2. 非能格動詞を基体とする場合

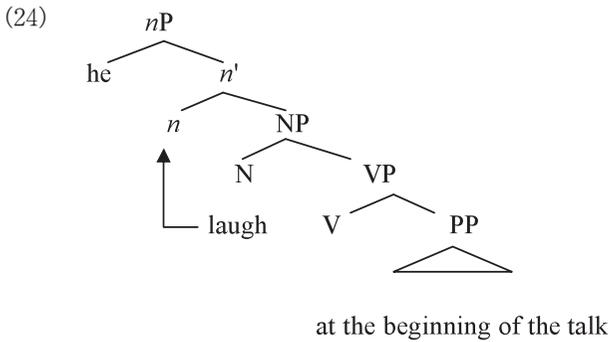
最後に、(19 b) の非能格動詞の派生過程を考えることにする。すでに述べたように(19 a) の非対格動詞との相違点は、主語が最初に併合される位置である。非対格動詞の場合と異なり、非能格動詞を基体とする派生では、統語的な主語が目的語位置に併合されることはない。従って、(19 b) のhis laugh at the beginning of the talkの派生の初期の段階は、次のようであると考えられる。

(23)

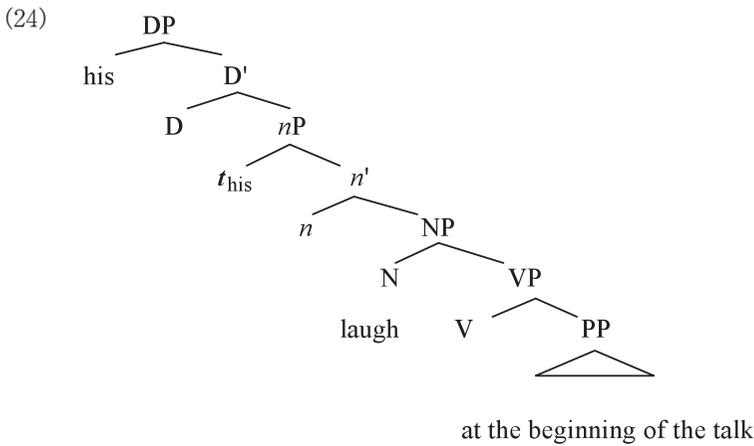


この構造においては、laughは接辞を伴わない、いわゆるゼロ派生 (Allen (1978) などを参照) により名詞化されるため、他の音形のある名詞化接辞 (-tionや-alなど) が生じる場合とは異なり、NPの主要部Nは音形を持っていない (ゼロ接辞)。しかし、この場合もNは接辞的な特性を持つと仮定されるので、(23) においてlaughはNへ移動している。

派生の次の段階では、(23) は nPの主要部 nおよび主語のheと併合され以下の構造を形成する。



ここでも、*n*の接辞的な特性により laughの移動が駆動される。最後に、名詞句の最大投射DPの主要部Dとの併合により、DPが形成されるとともに、Dとheとの間の一致操作により、heへの属格付与および、DP指定部への移動が適用され、以下の構造が形成され派生が終了することになる。



#### 4. 結び

従来、生成文法における派生名詞句の分析には、destroyなどの限られたタイプの他動詞を対象としたものが多く見られた。本稿では、自動詞も含め、いくつかのタイプの異なる動詞を基体とする派生名詞句の派生過程を議論し、いずれの場合も節の派生との並行性の観点から、その派生過程を統一的に説明できることを議論した。

## 参考文献

- Abney S. Paul(1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, PhD Diss., MIT.
- Allen, M. (1978) *Morphological Investigations*, PhD Diss., Univ. of Connecticut.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," Step by Step: Essays on *Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, Volume 3, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- 増富和浩(2009)「英語動名詞句の名詞性および動詞性と形容詞・副詞の認可について—ミニマリスト統語論の観点から—」研究紀要109, 41-55, 宮城学院女子大学.
- Masutomi, Kazuhiro (2009) "An Overview of the Internal Structure of English Noun Phrases," *Research in Humanities and Social Sciences* 18, 1-20, Miyagi Gakuin Women's University.
- Masutomi, Kazuhiro (2010) "On Nominal Phase and Its Interpretation," *Annals of the Institute for Research in Humanities and Social Sciences* 19, 1-19, Miyagi Gakuin Women's University.
- Perlmutter, D. (1978) "Impersonal passives and the unaccusative hypothesis," *BLS* 4, 157-189.
- Radford, Andrew (2000) "NP-shells," *Essex Research Reports in Linguistics* 33, 2-20.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.

# On the Differences and Similarities between the Derivational Processes of Different Types of Deverbal Noun Phrases

Kazuhiro MASUTOMI

## Abstract

The central problem addressed in this paper is the question of the proper analysis of the internal structure of deverbal noun phrases which derive from different types of verbs such as agentive verbs, psychological verbs, unaccusative verbs and unergative verbs. Firstly the derivational process of *destroy*-type deverbal nominals is introduced and compared with the case of clausal structures. Then, on the basis of the discussion, the derivational processes of the other types of deverbal nominals are considered. Also, in this paper, the differences and similarities between derivational processes of these types of nominals are a point of focus.